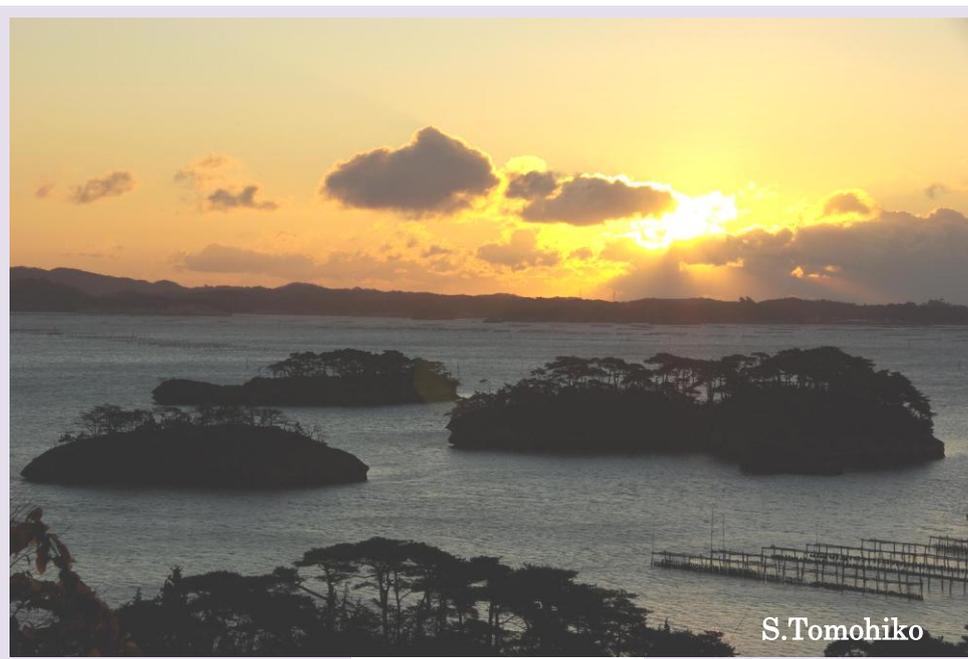


明けまして
おめでとーございます



平成三十三年 元旦

みつわ会東北支部



「粘土の様な」

支部長 加藤徹三



仙台大橋から望む

広瀬川に架かる仙台大橋と中ノ瀬橋の中間で、仙台地下鉄東西線の橋梁工事が進行しています。大赤字を覚悟してか隠してか分かりませんが、平成27年には“開通してしまう”ことになっているので、この周辺に新しい景観が生まれると思われれます。代わりに、工事が始まってからこの1, 2年、毎年渡って来る水鳥や野鳥の数と種類がめっきり減ってしまいました。

10年も鳥を楽しんだ同じ散歩コースでも、いつまでも同じという訳にもいかない様です。いずれ鳥達が戻ってくればそれに越したことはありませんが、せめて、完成した橋を渡る電車を眺めるのを楽しむこと（多分間に合う？）が替わりの楽しみになるものなのか、自分の気持ち次第ということも併せて、先のことは分かりません。それでも世の中変わるのですから、意固地な年寄りではなく、粘土の様に自由に形を変えて周囲の状況に順応出来る柔軟な心を持ち合わせた好々爺でありたいものです。では、会員の皆様、今年もお元気で過ごされます様。謹賀新年。

1月の行事

	支 部	みちのく損保
平成23年1月15日（土）		麻雀
26日（水）		新春セミナー
27日（木）	※昼食会「しゃぶ禅」12時～	

※出席の連絡を1月21日（金）までに友彦さんか業務伊藤さんに。

平成 22 年忘年会 平成 22 年 12 月 16 日 (木) 於「千駒」



誓う、我らまた集う、2011 年も



だま
騙されて、飲まされて
???



美味しい「酒道」などが

幹事は気を遣います
菊池さん、御苦労さま



お隣で別の忘年会がひっそりと催されていたので、紳士であるみつわ会としては、予定した無遠慮なスピーチは控えて、静かに美酒を味わうことに専念したのです。



「ウンウン、ソウソウ…」

「千駒の店主さまです」



白井さんの人物往来（続2）星利夫

昭和17年10月1日、白井ご先輩は、学徒動員2回生として盛岡第16歩兵部隊に入隊し、小銃隊第6中隊の1等兵となりました。

その当時の日米戦争の状況をみると、日本連合艦隊の作戦計画によるミッドウェー作戦は、昭和17年6月5日、日本の空母4隻対アメリカの空母3隻中心の戦いとなり、ハワイ作戦とは逆に、アメリカの奇襲攻撃を受け、日本の4隻が全滅し、搭乗員の多数が戦死、一方、アメリカは空母1隻を失っただけと云う大敗を喫した。この敗戦にも関わらず大本営は、損害を過小に発表している。

このミッドウェー作戦後、日本軍は、作戦上イニシアティブを取ってアメリカ軍に戦いを仕掛け、出てきたところを叩き潰すという方式がとれなくなり、戦争が、「五分」となって、米軍が攻勢をかけてくる可能性が増大したといわれております。一方、陸軍は、緒戦における連戦連勝により南方地域を完全に占領しており、意気盛んな状態にありましたが、アメリカの反攻は速く、昭和17年（1942）8月8日には、ガダルカナル島の争奪戦が始まりました。

このような戦況において、盛岡歩兵部隊の白井1等兵は、起床6時と消灯9時、その間演習のみならず日常生活即軍務生活では、上官には絶対服従でありビンタの洗礼も度々受けながらも、翌年の1月、幹部候

補生の試験に、合格しました。合格率30%の難関でした。

この16部隊には、ノモンハン生き残りの猛者、下士官もいて機会あるごとに、戦車、飛行機、火力に勝るソ連軍（ソ連、蒙古連合軍）と日本の関東軍との満州、蒙古の国境地帯、ホロンバイル高原での過酷な戦闘状況に就いて語り、実戦部隊の雰囲気を感じさせるものがありました。

因みに、旅順、大連を手中にし、更に朝鮮に南下してきたソ連勢力と日本国土を守る生命線の確保の意味合いを持つ満州における日本勢力との争いが、日ロ戦争となり、

その結果、勝利を得た日本は当時の清国から多くの権益、南満州の鉄道経営権、その鉄道に属する炭鉱の採掘権、そして鉄道守備隊の駐屯権を得まし

た。大正8年（1919年）から関東軍と云われた駐屯軍が、旅順・大連に司令部を置き、資源供給基地、また人口流出先としての満州の価値が増大したことで、満州国建国の機運が醸成され、昭和6年（1931年）9月18日、関東軍による満州事変が勃発しました。穏健で開明的、平和主義的な斎藤実内閣総理大臣も、陸軍大臣荒木貞夫等の満州権益拡大を図る多数派の主要閣僚の影響に抵抗し得ず、事変の拡大へと押し流されて、結局15年戦争への道を走ることとなります。そして翌昭和7年（1932）、関東軍の立てたシナリオ通り、満州国は、清朝最後の皇帝溥儀が執政となり、3月1日に建国宣言を発し、ここに満州国が誕生しました。満州を足下に納



めようと柳条溝事件を起こした日本関東軍の用意周到な計画による暴挙の成果であったとされます。日本政府も様々な経緯を経て9月15日正式に満州国を独立国として承認しました。

さて、白井1等兵は、昭和18年2月10日には2等兵となり、幹部候補生となります。

この1日前の2月9日には、「ソロモン群島のガダルカナル島に作戦中の部隊は、昨年8月以降、引き続き上陸せる優勢なる敵軍を同島の一角に圧迫し激戦敢闘克己的戦力を激砕しつつありしが、その目的を達成せるにより、2月上旬同島を撤し他に転進せしめられたり」との大本營の発表がありました。ガダルカナル島は、日本軍にとって、オーストラリア・ニュージーランドを制するラバウルの確保上も最重要拠点として飛行場建設に取り組み、完成寸前に、米軍偵察機に発見されて、ここに、戦略上、米軍にとっても死命を制するものと、両軍とも強力な部隊を投入する争奪戦が始まったのです。昭和17年8月8日にガ島に米軍が上陸し、機械化設営隊によりあっという間に飛行場を完成させて、戦闘機の大部隊を駐機させたのです。当初より強力な艦隊の援護を受けた米軍の大部隊が、全力を挙げて攻撃したのですから、飛行場建設目的の設営隊のみの日本軍は、たちまち駆逐されたのは当然です。その奪還のため、ラバウル発進の零戦（まだ米軍にない卓抜した戦闘能力をもつ）を投入しても、千キロの距離からの

飛来は、ガ島近辺の滞空時間10分程度であり、日本軍も全力を挙げたとは云え勝負にならず、昭和18年2月9日に最後の兵を撤退させて攻防戦は終わりました。

ダルカナル島よりの撤退は、米軍の制空権が大幅に拡大し爆撃機の航続距離が短縮され、日本陸軍が点在確保の南方戦線の島嶼のみならず、日本本土への空襲が格段に容易になったことを意味します。大本營発表及び戦時情報管制にあった放送・新聞紙上には、その目的を達した上での転進と強調していますが、これより南方戦線に於ける目的未達と撤退が相次ぐこととなります。

ガ島撤退の2カ月後の昭和18年の4月

1日、幹部候補生の白井2等兵は、上等兵に進級の上、仙台予備士官学校に入校しました。配属は、第1中隊第1区隊となり、演習は、通常、青葉山、宮城野演習場で実施されました。王城寺ヶ原での戦闘訓練は、夜間演習も並行して、ガス、火炎放射器、トーチカ攻撃訓練等も行われました。6月1日に伍長に進級。12月初めには福島の翁島から徒歩で仙台の学校まで2泊3日の強行軍で身体の限界も経験しましたがこれが学校訓練最後の演習でありました。12月中旬には、将校行李が渡され中には軍服、軍刀、双眼鏡、背囊、長靴、皮手袋、下着、外套等が入っていました。新任将校800名が将校服に身を正して勢揃いしたときは、真に圧巻でした。

(3月に続く)

次回支部便りは3月です